

聖書:使徒の働き19章21～40節

説教:手で造った物は神ではない

はじめに

前回のことを簡単に振り返ってから今日の所を見ていきます。パウロの身につけていたものを病人に当てると病気が去り、悪霊も出て行くという不思議なことを見たある人たちが、これはお金になりそうだと目をつけてパウロの真似をしたところ、逆に悪霊からひどい目にあわされます。そのうわさをエペソの町の人々に伝わると、祈祷師や魔術師をしていた人たちが悔い改めて信じていった。それが前回の話でした。

今日の所は一転して、パウロが語っていることについて怒りを燃やした人たちが群衆をけし立て、大騒動になっていく様子が描かれていて、「パウロもたいへんだったね」というひとことで終わりそうです。でもよく考えると、ここに書かれている話は今の時代と共通点があって、いろいろ考えさせられることがあります。

1 エペソ

1) 女神アルテミス

パウロが滞在していたエペソは今のトルコ領内にあって、地中海周辺では三本の指に入るほどの大きな町として栄えたと言われます。栄えた理由は、エーゲ海に面したよい港があったので物資の輸送が盛んであったことありますが、もう一つにこの町に女神アルテミスを祀った大きな神殿があったことが大きかったようです。当時世界で最も大きな建物であったと言われた神殿ですから、遠くの方からも人々がありがたいと言ってお参りに来るわけです。その神殿に祀られていたのが女神アルテミスで、安産、子授け（子どもが与えられる）、五穀豊穡に御利益があったのだそうです。

2) 神殿の模型で商売をする人たち

神殿が世界最大の建築物で、おまけにありがたい御利益もあるということですから、物見遊山がてら大勢の人が集まって来ます。人が集まればこれは当然のことですが、泊まる宿とか食事を提供する場所が必要ですから、そういうものが沢山建ったでしょう。わざわざ遠くから旅をしてきたのですから、ただご飯を食べて宿に泊まって帰るのはおもしろくありません。これも当然のようにお土産屋さんができる。どんなものが売られていたかと言

えば、24節にあります。「デメテリオという名の銀細工人がいて、銀でアルテミス神殿の模型を造り、職人たちにかなりの収入を得させていた。」巨大なアルテミス神殿をこの目で見て大いに感動する。その感動を故郷の人たちにも是非伝えたいと思うのは自然です。あるいは、この感動を何かの形で残しておきたい。そこでお土産屋さんで神殿の模型を買うわけです。ただ模型ではありがたみが薄い。銀で造ったというのならなんだか御利益もありそうな気がしてくる。おそらくそんなところだったのでしょう。銀細工職人の組織まであったといえるのですから、相当繁盛していたようです。洋の東西とわず、有名な神社や仏閣のあるところには必ず土産物屋さんが立ち並ぶというのは同じです。

2 デメテリオの訴え

1) 「手で造った物は神ではない」

さて、デメテリオという名の職人が同業者を集めてこう語った。25節後半から27節。「皆さん。ご承知のとおり、私たちが繁盛しているのはこの仕事のおかげです。ところが、見聞きしているように、あのパウロが、手で造った物は神ではないと言って、エペソだけでなく、アジアのほぼ全域にわたって、大勢の人々を説き伏せ、迷わせてしまいました。これでは、私たちの仕事の評判が悪くなる恐れがあるばかりか、偉大な女神アルテミスの神殿も軽んじられ、全アジア、全世界が拝むこの女神のご威光さえも失われそうです。」

まとめるとデメテリオは三つのことを言っています。一つ目。「パウロは、手で造った物は神ではないと言っている。」私たちにはあたりまえのことです。今さら説明する必要もないことですが、世の多くの人たちはこれを聴いて戸惑うはずです。私の生まれた田舎では、あちこちの道端に地藏さんやほこらが置かれて子どもの頃から拝むように教えられていました。中でもおもしろかったのは、石の板になにか文字が彫られていて何と書いてあるのかと読んでみると「馬頭観音」、つまり馬の頭のことと菩薩の一つなのだそうですが、とにかくそういう石を拝んでいた。私はクリスチャンになるまで、そういうことを不思議に思わず、先祖たちが大切にしてきたものを自分も受け継ぐのだというへんな自覚をして拝んでいました。人の手で造ったもの

は神ではないと知ったのは、クリスチャンになってからでした。

銀細工職人の人々は、パウロの話をうわさでいろいろ聞いていたと思うのです。でも彼らの心に残ったのは、私たちは神に対して罪を犯したという話しではなく、イエス・キリストが罪のために十字架で死なれたことでもなく、「人の手で造ったものは神ではない」とうひとことだった。

2) 仕事の評判、収入

なぜそこだったのか。それがデメテリオが語った二つ目に関わってきます。「私たちの仕事の評判が悪くなる恐れがある。」注意していただきたいのは、パウロが語っていることはまちがいだと言っているのではないことです。一番の関心はなんであったか。「自分たちの仕事の評判」です。このままでは飯の種がなくなってしまう。それが心配になって、デメテリオは職員仲間を集めて大規模な集会を企てた。パウロが語っていることが真実であるとか、そうでないとか、そんなことはどうでもよいのです。

パウロは銀細工職人の仕事を奪うために伝道していたわけでももちろんありません。人が罪から救われてほしいという純粋な動機で、聖書に書かれている真理をそのまま語っただけです。しかし、神のことばが語られるとき、人の奥底にある罪があらわになるのですから、しばしばこのような衝突が起こることは避けられません。

3) 女神の威光が失われる

デメテリオが語った三つ目。彼はこう言っています。「全世界が拝む偉大な女神アルテミスのご威光が失われそうです。」このことば、はからずもアルテミスと呼ばれる女神がどの程度のものであったのかをよく表現しています。「全世界が拝む偉大なアルテミス。」そこだけ切り取れば、いかにもすばらしい力に満ちた偉大な女神という印象なのですが、その後「ご威光が失われそうです」と続く。なぜご威光が失われそうなのか。パウロが言ったことばのせいです。「手で造った物は神ではない。」アルテミスの像は今も残っていて、写真で見ると石を彫ったもののようです。いずれにしても手で造ったものですから、神ではない。これは神でないと言われているものをわざわざ拝みに来る人はいません。それでご威光が失われていくわけです。そうならないようにどうするか。町中の人たちが興奮して叫び続ける。「偉大なるかな、エペソ人のアルテミス。」こう叫ばないとアルテミスの威

光は保たれない。多くの人が「偉大なるかな、エペソ人のアルテミス」と叫べば叫ぶほど、威光が輝くというのです。これはテレビや映画のスターによく似ている。ファンが、「きゅーすてき、サインしてください」と叫びながら大勢集まってくるとスターの威光が燦然と輝く。学生時代に映画のエキストラのバイトをしたことがありました。映画の主演だった高倉健さんをそのとき間近で見ましたが、スターというのはこういう人のことを言うのかと感心したことがあります。熱烈なファンがスターを育てていくわけです。

3 真の神

1) 手で造った物ではない

いま、デメテリオが語ったことを見てきました。では、私たちが信じている神はどうなのか。何が違うのかを考えていきましょう。二つあります。一つ目。これはもう当たり前のことですが、私たちが信じている神は手で造られたものではありません。お寺に行けば仏像があります。神社に行くと石や大きな木の周りにしめ縄を張り、それをみなが拝んでいます。しかし教会にはそのようなものは何もない。手で造ったものではないというのですからそうなのかもしれませんが、では神はどこにおられるのでしょうか。まったく形もなくにおいもなく触れることもできない、目に見えない方だから諦めなさい、ということか。そうではない。

2) 神殿となられたイエス・キリスト

二千年前、神は人の姿となられて私たちのところに来られ、イエスという名前をもっておよそ三十数年間私たちの間に住んでくださり、数多くの救いのみことばを語ってくださいました。この方は石や木ではなく、私たちとおなじ人となられた。だから私たちは神である方を、まるで人と接するかのようイメージで考えることができる。これが大きな特徴です。木や石だったらそうはいかなかったでしょう。

とうじ、エルサレムには神殿が建てられていて人々はそこで神を礼拝していたのですが、その神殿にイエスが立ち寄ったときに語られたみことばがヨハネの福音書2章19, 21節に記されています。「『この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。』イエスはご自分のからだという神殿について語られたのであった。」これを聞いた人たちは驚きました。この神殿を建てるのに四十六年もかかったのだから、三日で建てら

れるはずはないだろう、というわけです。旧約の時代、人々は神殿で礼拝した。しかしイエスが来られたことにより、この方ご自身が神殿なられるというのです。でもそのためには、十字架をとらなければなりません。ご自分のからだは十字架で裂かれ、三日目によみがえられたことにより、イエス・キリストという神のひとり子のみからだは新しい神殿となったというのです。この神殿は人の手で造ることはできません。だからパウロは、「人の手で作られた物は神ではない」と言えたわけです。

3) 神の栄光

さて最後に考えます。私たちの神であるイエス・キリストの威光はどのようにして輝くのでしょうか。アルテミスの神のように、人間が叫ばないと威光の光が暗くなってしまうのか。そんなことはない。むしろ、光が必要なのは私たちだったのです。私たちは暗闇の中でさまよう罪人でした。その罪から救うためにこの方が光なって来られた。私たちは、ただこの方の光を見て信じた。「一人の罪人が悔い改めるなら、大きな喜びが天にある」と書かれています。私たちが罪から立ち返り救われるとき、実は神の栄光が現されていく。

このようにしてくださる私たちの主をあがめ、またこの一週間を歩んでまいります。